

No	感染症(PT)	出典	概要
264	トリパノソーマ症	第48回 日本熱帯医学会大会 12C-02	日本におけるラテンアメリカ人の慢性シャーガス病キャリアーからの献血についての対策を検討した。カーミC液(CPD液)を用いてT.Cruzi感染マウス血液を4℃にて1-21日間保存処理を行ったところ、マウスへの感染性は無処理のものとは異ならなかったが、病原性はかなり減弱することが示された。しかし、T.Cruzi虫体はほとんどの白血球除去フィルターを通過した。現在の保存血液提供システムはシャーガス病の輸血感染防止には不十分であり、対策の改善が必要である。
265	ニパウイルス	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1031-1037	脳炎アウトブレイクの原因とリスク因子解明のため、2004年4-5月にバングラディッシュのFaridpur地区で調査が実施された。その結果、36例のニパウイルス患者が同定され、内75%が死亡例であった。ケースコントロール試験の結果、1名の患者との接触が最も高い感染リスクであることが示された。環境検体のRT-PCR試験により、病院の表面にニパウイルス汚染があることが明らかとなった。この調査により、ニパウイルスのヒト-ヒト伝播のエビデンスが示された。
266	パルボウイルス	J Gen Virol 2007; 88: 2162-2167	ヒト血漿プール中に新規のパルボウイルスPARV4とその変異株であるPARV5が存在することが最近示された。4株のPARV4と2株のPARV5のDNA配列を分析したところ、PARV5はPARV4と同様に2つのオープンリーディングフレームを持ち、PARV4とPARV5は92%近くのアミノ酸相同性を示した。両者は密接な関係のあるジェノタイプであり、ジェノタイプ1と2(PRV5と呼ばれていたもの)から成るPARV4という1つのウイルス名を使用することを提案する。
267	パルボウイルス	Transfusion 2007; 47: 1756-1764	米国の血液センター7施設において2000-2003年の期間に採取した5020名の供血者由来の保存血漿検体を高感度PCRスクリーニング法を用いてパルボウイルスB19 DNAについて検査した。B19 DNA陽性率は0.88%であった。DNA陽性検体の全てがIgG陽性で、23%がIgM陽性であった。IgM血清陽性率はDNA値と相関した。
268	パルボウイルス	Transfusion 2007; 47: 1765-1774	B19ウイルスの不活性化機構を調べた。熱または低PHによるB19Vの不活性化はカプシド分解によるものではなく、感染性ビリオンがDNA枯渇カプシドへ変換することによって起こった。DNA枯渇カプシドは感染性はないが、標的細胞に接着することは可能であった。Parvoviridaeの他のウイルスとの比較試験の結果、被殻状態でのB19V DNAの著しい不安定性が明らかとなった。B19Vが不活化処理に抵抗性が低いのはこのためと考えられる。
269	パルボウイルス	Transfusion 2007; 47: 883-889	1993-1998年及び2001-2004年の間に製造された6つの第Ⅷ因子濃縮剤の284ロットについて、in-house NAT法によりパルボウイルスB19 DNAを測定し、抗B19 IgGも併せて測定した。その結果、B19 NAT非スクリーニング血漿から調製した製剤のB19 DNAの陽性率及びレベルは高かったが、製造方法が異なると、製品間で様々であった。血漿のB19 NATスクリーニングは、最終製品中のB19 DNAレベルを下げ、大半の例で検出限界以下とさせ、B19伝播のリスクを減少させた可能性がある。
270	パルボウイルス	Vox Sanguinis 2007; 93: 341-347	過去30～35年間に製造された第Ⅷ因子製剤中にヒトパルボウイルスが存在するかを調べた。175ロットのうち28ロットがPARV4シーケンスを含み、その内2ロットにジェノタイプ1型及び2型の両方が存在した。最大ウイルス量は $10^{5.5}$ copies/mL以上であった。PARV4陽性の第Ⅷ因子製剤の大部分は1970年代及び1980年代に製造されていた。B19Vは175ロット中70ロットで陽性であった。
271	ハンタウイルス	Epidemiol Infect 2006; 134: 1333-1344	ドイツ南東部Lower Bavariaにおけるハンタウイルス感染の流行は2004年4月から始まった。血清学的、遺伝子的調査の結果、同地方のハタネズミ集団がPuumala virus (PUUV)の有効な宿主であることが明らかとなった。異なる4箇所で捕獲されたハタネズミに由来する部分的なPUUV-S セグメントのアミノ酸配列は、多様性が低かった(<3.1%)。このPUUV配列が2004-2005年のヒトハンタウイルス感染者数の増加の原因と考えられる新規のPUUVサブタイプの特徴である。
272	ヒトポリオマウイルス感染	J Virol 2007; 81: 4130-4136	ヒトの気道からの検体をウイルススクリーニングし、KIポリオマウイルスと暫定的に名付けた未知のポリオマウイルスを同定した。このウイルスは、遺伝子のearly領域では、他の霊長類のポリオマウイルスに系統遺伝学的に近縁であるが、late領域では、既知のポリオマウイルスに対して相同性が少ない(アミノ酸同一性30%未満)。このウイルスは、PCRによって、鼻咽頭吸引物637例中6例(1%)と便検体192例中1例(0.5%)で検出されたが、尿及び血液検体では検出されなかった。
273	ヒトポリオマウイルス感染	PLoS Pathogens 2007; 3: 595-604	急性呼吸器感染症に罹った患者からの呼吸分泌物中に存在する新規のポリオマウイルスを同定し、WUウイルスと名付けた。WUウイルス遺伝子は5229bpで、Polyomaviridaeファミリーの特徴を持つ。系統遺伝学的分析から、このWUウイルスは、既知の全てのポリオマウイルスとは異なっていることが明白となった。オーストラリア及び米国の急性呼吸器感染症患者2135例中43例からWUウイルスが検出され、地理的に広く分布していることが示唆された。
274	ブドウ球菌感染	日本組織移植学会雑誌 第6回日本組織移植学会総会・学術集会 2007年8月4日	肺動脈ホモグラフトの移植を受けた2歳男児が、術後6日に39℃の熱発を認め、CRP、WBCも共に上昇した。術中に提供されたホモグラフト凍結片から多剤耐性MRSAが報告された。移植された肺動脈弁は凍結前の培養検査では抗生剤処理前・処理後共に陰性であったが、同ドナーの抗生剤処理前検体よりMRSAが検出されていた。MRSAまたは真菌が1検体からでも検出された場合は、同ドナーから摘出された組織は全て移植不可とすることとした。